

タイトル	北海学園大学人文学会第2回記念シンポジウム記録 中国の人文的教養から
著者	大谷, 通順
引用	北海学園大学人文論集(59): 19-26
発行日	2015-08-31

## 人文学の新しい可能性(2)

— 安酸敏真『人文学概論』を読む —

司会	本城誠二氏 (英米文化学科教授)
パネリスト	大谷通順氏 (日本文化学科教授 中国文学) 柴田 崇氏 (英米文化学科教授 メディア論, 生態心理学) 仲松優子氏 (英米文化学科准教授 フランス近世・近代史) 手塚 薫氏 (日本文化学科教授 文化人類学)
日時	2014年11月22日(土曜日) 14:15~17:00
会場	豊平校舎教育会館1階 AV4 教室
主催	北海学園大学人文学会
共催	北海学園大学人文学部, 北海学園大学大学院文学研究科

## 中国の人文的教養から

大 谷 通 順

私は「人文主義」の何たるかを十分に理解していませんでした。蒙を啓いてくださった安酸先生に、まず厚く御礼を申し上げます。

ここで私が発言を求められた理由を改めて考えてみますに、先生が「あとがき」でふれておられた、東洋についての言及の少なさを補う、という

課題が思い浮かびます。確かに、先生のご著書を拝読する過程でいく度も頭をよぎったのは、日本人は何をしていたのか、という問いでした。あいにく日本人の営為について私は門外漢ですので、ほかの先生方からのコメントを期待するとして、私としては中国の古典に基づき、前半と後半、大きく二つのことがらについてコメントさせていただきます。

前半は、先生が人文学を歴史的に振り返っておられる部分への、中国からの補足となります。後半は、キーワードの「人文」の語源についてです。ただし、私が日ごろ研究でかかわっているのは、これから申しあげる聖人君子の古典ではなく、野卑な近世小説の世界です。今、こうして口を開くのも、なにやら面はゆく、またお話しできるのもせいぜい教科書で教わったことがらの域を出ません。このような弁解をしたうえで、以下、おもに参考文献\*の冒頭3篇の論考から助けを借りることにいたします。

一、

川合康三「中国の士大夫と古典的教養」のことは借りると、中国では、

「教養」はほかのどの文化圏よりも明確なカタチで、かつ長い時期にわたって機能してきた。それは中国の文化、中国の社会の本質を規定するほど重要な役割をはたしてきた。

ということになります。その古典的教養は、人の知的・道徳的育成を理想とするものにほかならず、細目にわたっても、西洋の人文学と相通ずる点がいくつかあります。

思いつくままにそれらをまとめると、第1は、「無用の用」というべき性格、第2は、中心思想たる「倫理」、第3は、その中心思想を培い伝達する「古典」、以上の3点です。

まず第1の「無用の用」について、川合氏は中国の人文的教養を「社会生活を営む上でどうしても必要な技術、というよりも、生活や仕事に直接

関わるわけではないけれども、それをもつことによって人間としてのふくらみがでてくるような、そうした余剰の部分」とまとめています。安酸先生のご著書に引かれたシラーの表現「パンのための学問」の対極にあるものといってよいでしょう。中国では、周の時代（紀元前11世紀頃）に貴族の子弟の学ぶべき学問として、「六芸」がありました。そのうち実用性の高い「射」（ゆみ）・「御」（うま）・「書」（よみかき）・「数」（そろばん）の4種以外に、「礼」すなわちマナーと、「楽」すなわち音楽の挙げられていることが注目されます。「礼楽」はその後、孔子に導かれた学問集団、儒家においても重要な位置を占めるようになります。儒学の正典、五経の一つである『礼記』、すなわち個々人のマナーから国家の諸々の祭祀にいたるルールまでを網羅した書物では、儒学の主要な教えを「四教」すなわち「詩書礼楽」にまとめました。マナーと音楽（礼楽）に、さらに文学の「詩」と、古代の聖王たちの発言録である「書」を加えたものです。

紀元前2世紀、漢の武帝の代に儒学が国教化されて以来、これらの情報を必読テキストとして定め、それを読み、かつ日々の行動の指針とすることを、まっとうな人になるための条件と見なすようになったことは重要です。つまり「古典」が成立したのです。先にまとめた、中心思想としての「倫理」（第2点）、そしてそれを培い伝える「古典」（第3点）とは、このことをさします。ただし「古典」の語それ自体は伝統的な漢語ではなく、日本人が西洋の概念と切り結んで編み出した、いわゆる「新漢語」です。「古典」に相当する古代漢語は「経」——「永遠の書」——であり、「五経」すなわち「五つの永遠の書」が必読テキストの最も早い例となります。吉川幸次郎「中国の古典」は、さらにこれら必読テキストのうちでも、特に歴史と文学の2ジャンルを取りあげて、「人間性の可能性のさまざまを、こまかに知悉する書物として、重視されたもの」と位置づけています。「五経」中にその先例を求めれば、歴史書としては、魯国の年代記である『春秋』、文学書としては、周代の歌謡集である『詩経』がそれにあたります。

ただし、「詩書礼楽」の教養は「余剰の部分」といいながら、実際には官途に就くための必須の技能でもあり、特に紀元後11世紀に生じた社会構造

の大変動から、家柄ではなく、知的訓練の結果を見て人材を選ぶ科学制度が徹底した宋代以降には、その実用的側面が顕著になりました。「詩書礼楽」の教養を試験で検査するとなると、勢い、経典を暗誦できるか、経典を踏まえて詩や文を作ることができるか、などといった、どちらかといえば瑣末な技能が評価の対象になりがちです。また清代末年に入って、その試験に合格して選り抜かれた英才たちが直面した西洋文明は、当時風というと「鉄艦大砲」(鋼鉄の蒸気船と大砲)、すなわち科学技術に支えられた圧倒的な武力であり、それを前にして彼らは完全に無力でした。その結果、中国的教養は時代遅れの無用の長物というレッテルが貼られるようになったのです。またそのような西洋の武力に眩惑されることのない人々の中にも、近代中国の文豪、魯迅のように、むしろ伝統的な儒学の教え、それ自体がもつ欺瞞性や非人間性を徹底的に排撃する動きが現れました。したがって、なかなか一筋縄で単純に評価するわけにはいかないのですが、ここでは、とりあえず古代の理想は理想のまま受け取ることにします。すなわち、人文的教養はそれを学ぶ者の人格を錬磨するものであり、その結果として徳を身につけた人物だけが、「経世済民」、すなわちこの世を秩序だて、一般大衆を救済することができる、と中国では長く信じられてきたのです。

## 二、

後半でお話したいのは、中国古典の教養を身につけた私たちの先達が、西洋の概念と切り結んだ結果、生みだした訳語についてです。彼らは敢えて原語のラテン語、ドイツ語、フランス語および英語などを用いず、それらを漢語に訳しかえました。それには、そうすべき必然性があり、またその新たな漢語を生み出す源となる教養があったからです。ここで、安酸先生がご著書の中で話題にされている「文学部」の「文学」と、「人文学部」の「人文」について少々コメントを加えたいと思います。

「文学」の語義を漢和辞典式に羅列するならば、まず大きくは、儒家の学説全般をさします。続いて、学術のジャンル分け、しかも四つあるジャン

ルの一つをさします。これについては、のちに詳述します。次に、文章を書く才能(文才)や、文章を書く才能と学問の深さ(才学)を示し、さらには、それを保有する人をさします。そして最後に、官位の名称になります。そのうち、いま述べたジャンル分けに関わる用例としては、狭義と広義のものがあり、狭義の「文学」は、5世紀の南北朝、南朝の宋において、学問の4分野「四科」の一つでした。その具体的な内容は不明ですが、他の三つのジャンルが、「玄学」(老荘思想や仏教)・「史学」・「儒学」ですので、それらを含まない、文章表現に特化された学問と推測されます。しかし南朝の宋は約60年の短命な王朝で、狭義の用例も多くは見られませんでした。

対照的に、広義の「文学」はいわゆる「孔門の四科」、すなわち孔子の門弟の中でも優秀な10名を4ジャンルに分類した一つで、たいへん広く用いられました。そのジャンルを列挙すると、まず第1は「徳行」で、倫理を身につけて実行する人をいい、第2は「言語」で、他人を説得する弁舌に長じた人をいい、第3は「政事」で、行政的な実務能力のある人をいい、第4の「文学」は、文献をもとにした学問に秀でた人をいいます。これをとらえて川合氏は、人文的教養に相当する古代漢語は「文学」であり、「文学部」というときの「文学」も、漢語本来の意味が今の日本語の中に生きている数少ない例であると述べています。

一方、人生の真理を審美的に述べる芸術である literature〔英〕や Littérature〔仏〕の訳語として「文学」をあてることは、西周の「百学連環」にはじまり、現在の私たちの用例として定着しています。しかし、当時、西自身もその用法を堅持していたわけではなく、鈴木修次『文明のことば』で明らかにされているとおり、もう一つの訳語「文章学」とのあいだでさかんに揺れました。その原因は、西に漢学の素養があればこそ、「文学」とは文字・文献をたよとする学芸一般をさすものという認識が頭にしっかりと根をおろしていたため、と推測できるでしょう。ちょうど、economics〔英〕を「経済学」とすることに彼が抵抗して、『孟子』に典拠のある「制産学」の語を用い、一方「経済学」は政治学の意味で用いたのと軌を一にします。なぜなら「経済」とは「経世済民」のことであり、先に述べたよ

うに、内面において人文的教養によって徳を身につけた人が、外面世界で期待される働き——すなわち世の中を秩序立て、一般大衆を救うこと——をあらわす語だったからです。

明治10年の東京大学「文学部」を嚆矢とし、日本の学校制度において「文学部」の名は、広く文献読解をよりどころとする一切の学問分野を総称することになります。以上のようなわけで、それは伝統的な漢学から見てそうおかしいことではなかったのです。ただし、もっとせまい literature も同じ「文学」の名で呼び、「文学部」の下に「史学科」・「哲学科」と並べて「文学科」を置くという不整合については、確かに困りものです。鈴木氏はその点について、「日本人のおおまかさには、驚きいるものがあるが、厳密な定義を前提にして、その定義からはずれるものを廃除するというところをしないところに、むしろ別の長所を見るべきかもしれない」と、苦笑とも、感心ともつかない評価をしています。以上、述べてきましたように、すでに狭義の literature の「文学」の語義が一般化している現在、哲・史・文の全分野をおおう広義の概念として、「文学」の代わりに、「人文学」の出番がやってきたとってよいかもしれません。

さて、そこで次は「人文」の語です。鈴木氏は「人文科学」の語が生まれたのは昭和に入ってからのことと推測していますが、具体的にその初出は示していません。それはともかく、「天文学」、および自然地理学の旧称である「地文学」と並べて、「人文学」を見れば、やはり漢籍に対して一定の教養のある人物が命名したことは想像に難くありません。「天・地・人」の「三才」は大きな統一世界を形作る三つの小さな世界だからです。

中国の文献で「人文」の語のルーツは古く、やはり五経の一つ『易経』にはじめて現れます。『易経』は端的にいうと筮竹占いの本ですが、丹念に読むと、自然科学が未発達時代における一つの宇宙論であり、また数から神秘的な意味を読みとろうとする数秘術の書ともいえます。そこに書かれたことは、玄妙でわかりにくい点が多々あるのですが、筮竹占いのある結果（「賁卦」）をどう解釈すべきか、孔子が注釈を加えたといわれる箇所（「象伝」）に、「人文」を「天文」と対峙させた、次の句が出現します。

天文を觀て、時の変わるのを察し、人文を觀て、もって天下を教化・形成する。(觀乎天文，以察時變。觀乎人文，以化成天下。)

「文」の字それ自体の原義は、2世紀の漢字辞書である許慎の『説文解字』によれば、人類原初の記号であるバツテン、白川静氏の文字学では、人体の胸の部分に彫られた入れ墨ということになります。いずれにせよ記号・文様を意味する漢字です。記号・文様が天界にあらわれると「天文」、人界にあらわれると「人文」となるわけです。7世紀の唐の大学者、孔穎達はこの部分を解釈して、聖人というものは天文——すなわち天体の運行や、その他、天上にあらわれるさまざまなし——をよく調べて、時の移ろいを察知し、人文——すなわち人の世のさまざまな有りよう——をよく調べて、「詩書礼楽」の四教もその有りように基づき、人びとをよい方向に教え導かなければならない、と読みました。要するに「人文」とは人の世の有りようということになります。ただし、他方で「人文」は「詩書礼楽」そのものであり、聖人はそれをよく調べるのだという読み方もあり、私にはどちらが正しいのかわかりません。両論を併記しておきます。

『易経』よりも時代がくだるとともに、「人文」の「文」が内包する意味に変化が生じます。6世紀、南北朝時代、南朝の梁の昭明太子は詩文集『文選』を編纂し、ご存じのように、そこにおさめられた詩文は古代日本人にとっても欠くべからざる教養となりました。『文選』とは、その名も「文」の「選ばれた」ものですから、昭明太子の書いた「序」には「文」とは何ぞやという定義が示されています。そこでも『易経』の同じ箇所が引用され、「文」の偉大さがしきりに強調されるのですが、その「文」はもちろん単なる記号や文様ではなく、すでに文字による記述、すなわち「<sup>ぶん</sup>文」、とりわけ『文選』の場合は審美的な文学作品に進化しているのです。「文」の内包する意味の変化は、9世紀、唐の文人、李翱の次の非常に明快な定義に顕著にあらわれています。

太陽・月・星々は天空をへめぐる。これが天の文である。山川草木は

地上に散らばり広がる。これが地の文である。意志や精神および言語は人から発せられる、これが人の文である。(日月星辰経乎天、天の文也。山川草木羅乎地、地之文也。志気言語発乎人、人之文也。)

要するに人間の思考・精神活動と、言語による表現活動を「人文」ととらえたのです。

私たちが身をおくこの学問領域に「人文」の名をつけた先人がだれかはわかりませんが、やはりその人物にも上述の諸々の認識があったと考えるのが妥当でしょう。もちろん西洋由来の概念や思想を語源にさかのぼって理解することは欠くべからざる作業です。しかし、それと同時に、私たちの先人がその概念や思想を、中国の古典的教養をとおして、みずからの血肉としようとしたその営為をおろそかにすることはできません。彼らの誤解や不足をもよくかみ分けたいうで、私たちの立脚点としてこそ、その概念なり思想なりを単なる借りものとせず、みずからの血肉とすることができるのではないかと考え、以上のコメントをいたした次第です。

#### \*参考文献

- 吉川幸次郎「中国の古典」(『吉川幸次郎全集』第1巻, 1984)
- 鈴木修次『文明のことば』(文化シリーズ——ことばから考える日本人論〈4〉)文化評論出版, 1981)
- 川合康三「中国の士大夫と古典的教養」(『新しい教養を拓く——文明の違いを超えて——』所収, 岩波ブックレット No.483, 岩波書店, 1999)
- 方規規「近現代中国“文明”、“文化”観——論価値転換及概念嬗変」(『史林』1999年第4期)
- 李広柏「中国歴史上の人文主義思潮」(『華中師範大学学報(人文社会科学版)』2001年第4期)
- 劉象愚「論文化観念的演化」(『学术界』2006年第3期)
- 黄興濤「晚清民初現代“文明”和“文化”概念的形及其歴史実践」(『中国近代史』2007年第2期)